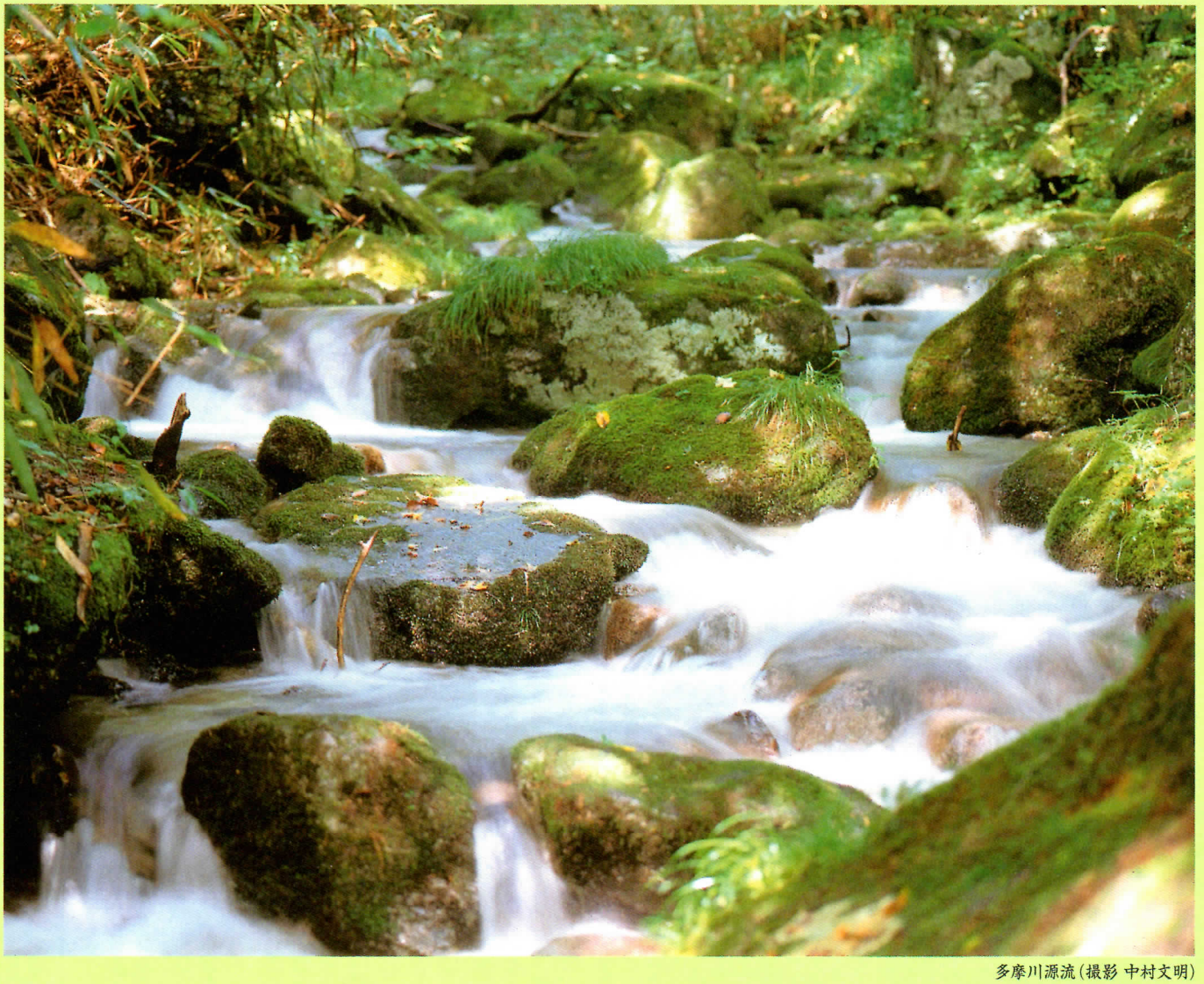
源流の四季

第41号（2011年4月） 春
Spring

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村1911
TEL 0428(87)7055　FAX 0428(87)7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:b-nakamura@npokosuge.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会　NPO法人多摩源流こすげ
印　　刷／(株)サンニチ印刷



多摩川源流（撮影 中村文明）

Contents 目次

川づくり・森づくり・地域づくりを推進 …… 2～3
多摩川源流大学のすべて！ …… 4～5
『植物と人々の博物館』案内 …… 6
広葉樹の苗木を育てる会が学習会 …… 6
緑のボランティア募集 …… 7
第3回全国森林作業道研究会の実施要項 …… 7
第3回多摩川源流トレイルラン大会 …… 8

川づくり・森づくり・地域づくりを推進

河川環境管理財団の助成を受けて

NPO法人多摩源流こすげと多摩川源流研究所、源流大学現地事務局は、平成22年度において、河川環境管理財団の助成を受けて、河川を活かした環境教育活動や「川づくり・森づくり」活動を積極的に推進した。

川づくり・森づくり・地域づくりを目的にした活動では、河川への流域市民の理解を深める活動を展開、特に源流体験教室にはこれまでにない参加者があった。木づかい文化の継承をめざすロクロクラブは、指導者養成講座に熱心に取り組んだ。小菅の特産物を生かした地域づくりゼミナールでは、小菅産の自然薯をふんだんに使った「源流お好み焼き」講習会や作業道ゼミナールを開催した。流域連携を目指して高橋裕先生を講師に招いた多摩川連続ゼミナールや流域連携会議の開催、源流大学による大田区の海苔のふるさと館との交流など様々な分野での取り組みが展開された。

地域づくりゼミナール（2月24日）

大きな反響広げた源流体験教室

平成22年度には、源流体験教室に流域の水辺の楽校等から24団体、1700名が参加し、大きな反響があった。多摩川流域の水辺の楽校からは、狛江水辺の楽校、かわさき水辺の楽校、川崎とどろき水辺の楽校、福生水辺の楽校、立川水辺の楽校、府中水辺の楽校が源流体験に参加した。さらに、宮内中学校、三鷹市社会教育会館、昭島市環境保全課、サイエンスクラブ、バオバブ保育園、稲城市青少年委員会、港区青山青少年委員会、世田谷アドベンチャークラブ、矢口小学校親子有志、京浜河川事務所など数多くの団体が源流体験に参加した。

参加した大人たちは、「東京の水の源を保全し、持続する現場を知った。優しい緑の中で光と太陽の差し込みが絶妙だった。」「本当に楽しかった。テレビCMに出てくるような体験でした。普段、冒険しない娘が思い切っていろいろなことに挑戦し、誇らしげに笑う姿にちょっとジーンとした。」などと語っていた。

また子ども達は「最初はそんなに大変じゃないと思っていたが、やってみると冒険みたいで楽しかった」「印象に残ったことはロープを使ってガケを渡ったところ。一瞬バランスが崩れて落ちそうになり、怖かった。でも楽しかった」など体験の感想を寄せ、子ども達の元気な表情と輝く笑顔が源流の谷間に溢れていた。

好評の源流体験教室（8月）

多摩川連続ゼミナールを開催

多摩川は昔から江戸と東京の発展に深く係わってきた。日本の政治、経済、文化の中心都市になくてはならない存在であったといえよう。こうした多摩川の歴史や文化などの特性について我が国の河川工学の第一人者の高橋裕先生を講師としてお呼びして、川崎市多摩区・せせらぎ館を会場に7月2日、10月5日、11月16日の3回にわたり、多摩川流域ネットワークが主催（協力　多摩川流域懇談会・NPO法人多摩源流こすげ）し、多摩川ゼミナール連続講座を開催した。ゼミナールには、多摩川に関心のある市民が毎回約60名参加した。

第1回ゼミナールで、高橋先生は、「多摩川の自然特性」に関して、昭和55年以降の河川行政の経過と住民運動に触れ、河川環境管理計画や多摩川流域懇談会、河川整備計画などの成果を詳しく解明した。第2回では、小河内ダム竣工から狛江地点破堤までの歴史を、第3回では、玉川上水、内務省直轄工事、戦後史（カスリン台風、多摩川水害訴訟、東京高裁差し戻し控訴審住民勝訴）などの多摩川の歴史を詳しく解説した。

また、多摩川流域連携会議が12月22日、川崎市多摩区せせらぎ館で開催された。

多くの市民団体が参加した流域連携会議
（12月22日せせらぎ館）

源流体験教室

開催団体募集

毎年好評を頂いております源流体験教室の受け付けを開始しております。子ども達に本物の自然を知ってほしい、源流の森と川の関わりを体験してほしい、源流から河口に繋がる多摩川流域の姿をしっかり実感してほしいという思いで源流体験教室を開催しております。源流の渓谷の深さ、水の冷たさを体験した子どもたちは、目の輝きが違います。また、マスのつかみ取りと串刺し体験も好評です。キャンプ場、民宿などの宿泊施設もありますので、まずはお問い合わせください。今年は、申し込み団体が多く、希望の日程が確保できないことがあるかもしれませんが、ご了承ください。

□源流体験実施場所　小菅村川入・源流体験ゾーン
□源流体験の期間　7月～9月上旬
□お問い合わせ　多摩川源流研究所・
NPO法人多摩源流こすげ
電話　0428-87-7055
ファクス　0428-87-7057

河川環境管理財団助成事業

木づかい文化を復活し、源流の川と森を守る

木づかい指導者養成講座を実施

小菅村は、村の面積の94%が森林に覆われている。木材価格の低迷で人工林も、広葉樹林も管理が行き届かず、木材資源の活用が進んでいない。こうした現状を打開しようと小菅村では、北都留森林組合や山林所有者と協力して緑のボランティアによる間伐と木づかい文化の復活に力を注いでいる。

地方の元気再生事業の成果により、村にロクロ文化が根付いたことから「源流域の木材の利用と村のロクロ文化の発信と体験」を目標に、村民有志が集まり、木工ロクロクラブが結成され、今年度から「川づくりは森づくりから」をテーマに「木づかい指導者養成講座」が年間15回にわたって取り組まれた。ロクロクラブは、下流域の住民や村内観光客にロクロ体験教室を開催することを目指し、先ず本年度は、クラブ員の技術向上としてお盆やお椀などの基礎技術の習得に取り組んだ。

川づくり・森づくり活動

源流大学生が「大森海苔のふるさと館」訪問

多摩川源流大学事務局と東京農業大学の学生13名は、12月5日、大田区の大森海苔のふるさと館を訪問し、多摩川河口域の海苔づくりの歴史を学ぶと共に、海苔づけ体験を行った。この事業は、河川環境管理財団の支援を受けて、「多摩川の源流から河口までの、流域連携を具体的な形とすること」を目的に実施されたもので、参加者から好評であった。

源流大学事務局は、多摩川の流域全体を学びのフィールドとして活用するには、流域の市民団体の拠点施設との連携が欠かせないとして、先ず現地に赴き、体験することが第一と考え、河口大田区の海苔のふるさと館訪問が実現した。海苔のふるさと館では、現地の講師から歴史や文化を学ぶと共に、海苔づけ体験を経験し、今後の流域連携の方策について意見交換した。源流大学では、多摩川の河口での体験を初めて実施したが、多くの学生が今回の体験について満足しており、今後も続けてほしいとの声が上がった。

流域交流活動（12月5日）

森づくりゼミナール 好評

小菅村・源流研究所は、源流大学やNPO法人多摩源流こすげと協働で、9月～12月まで4回に渡って緑のボランティアによる間伐事業（国土緑化推進機構助成事業）を実施した。参加者は、流域の市民と源流大学の学生あわせて70名、一回ごとに森が明るくなる様子を確認することができた。

この事業は、平成15年に開始され、継続されているもので、説明会では、東京農業大学の菅原泉准教授が「森づくりゼミナール」（河川環境管理財団支援事業）として、健全な森づくりの基本を講義し、参加者に大変好評だった。

「健全な森づくりへの提言」

東京農業大学造林学研究室　菅原　泉

生産者（植物）→消費者（動物）→分解者（微生物）

この小見出しは、「生産者」から「消費者」を経て「分解者」で終わるのではなく、さらに「分解者」からの恵みが「生産者」に戻っていくサイクルがスムーズに行われる森林が好ましいことを表している。では「分解者」から「生産者」に戻る場所はどこなのかと言えば、「土」である。これについては、後述する。

また、「方健全な森林を形成するには、林業の再構築の方向性がどちらに向いているかである。すなわち「木材の価値」、それと「国土保全的な価値」、「保健休養の価値」の3つが今後の大きなテーマの柱である。

手入れを怠ることは、環境へ負荷を与えること

今日注目されている森林の多面的機能を簡潔に言い表すと、森林があることでいろいろな作用が守られるということである。

それをどう評価するかというと、「森林の有する機能の定量的評価」であり、毎年、森林が果たしている機能をお金に換算すると約70兆円規模になる。これは、日本の国家予算に匹敵するもので、とりわけ、国土保全機能に関連する土壌の保全機能が重要となる。

現在、森林の機能が低下しているが、これは主に1000万㌶の人工林における手入れ不足（主に間伐）に端を発している。とくに土壌に対して悪い影響をおよぼすのは、ヒノキ林である。ヒノキの林の手入れを適正にしないと、スギ林よりも荒れ方のスピードが非常に速いといわれている。

ヒノキの葉は枯れて地面に落ちると、鱗片状にバラバラと分かれるが、スギの場合は、地面に落ちるととげ状の針葉があるので枝から離れにくい。ということは斜面においても定着しやすく、移動しにくい。とりもなおさず、表面土壌を固定する能力が高いのである。ところがヒノキの鱗片状になった葉は雨が降るたびに流されて、表面浸食される割合が高くなる。材価の価値としてはスギよりもヒノキは高いが、手入れを怠ると環境へ与える負荷は大変大きくなる。

次は「土壌をつくる条件」についてであるが、最も大切なことは、「森林の水源涵養機能」である。これは先述した森林機能の定量的評価にも有ったが、肝要なことは雨が降って土壌中に浸透することである。雨が降ってすぐに地表を流れることになれば、貯水の効果が減じ、すぐに水かさが増えてしまうが、徐々に流れ出していくと、ある程度多量の雨が降ったとしても大丈夫である。このような土壌の構造は団粒構造をしている。良い土というのは、カステラのような穴だらけの土である。いろいろな微生物が棲み、「生産者」に栄養分を供給するための微生物活動を活発にするには、ぎっしり詰まった空間よりも、この団粒状構造がいくつか集まった土のほうが酸素もあるし、水もちもいいのである。つまり、微生物活動を補佐する非常に大切な土の構造であるため、その構造をした土になるような山づくりをすることが重要である。

本当の山づくりを伝承していくことの大切さ

「これから目指すべき人工林施業」として人工林、天然林、複層林、針広混交林などが薦められているが、このような山をつくるのは簡単ではない。例えば複層林施業を行うには、林床に達する光量を調節しないと、下木が鉛筆のような細いものしか育たなくなるので、1回に大面積を皆伐するよりも、複層林施業、あるいは針広混交林施業は、より集約的な施業が求められる。そのためには、現場にアクセスするための道が必要となる。しかも、山を荒らさない道づくりをしなければならない。それには、大橋式作業道の導入が積極的に行われる必要がある。

また、針広混交林施業地は点状に樹木を配置するのではなくモザイク状とし、作業道を入れるときは、広葉樹のなかを通して、その下に針葉樹があると非常に集約的な施業ができる。そのモザイク状の樹種も郷土産の種子から養苗したものを植栽し、目的に応じて椎茸材生産用にするか、それとも大径木仕立てにして1枚板が採れるようにするのかを検討し、100年から150年の単位で考えるような広葉樹林施業をしていくことが大切である。

森林ボランティア活動の意義と期待されること

森林ボランティアの評価すべきところは、森と人をつなげることと、人と人をつなげることで、これができるのが森林ボランティアである。

森をなんとかしたいという思いで参加していることから、山村に住んでいる方々と下流域で生活をしている人々の交流によって、新たな刺激や技術を学ぶことができ、新しい連帯意識が生まれてくるであろう。その活動には種々ある方々を技術講師として招き、ボランティア参加者に安全教育を施しながら、間伐作業を行っている。ボランティア参加者の作業量は、専門職と比較にならないが、メッセンジャーとして森林の大切さを啓発普及することは意義深いことである。

流域の市民とともに森林体験（源流大学白沢　10月9日）

全4回連載　第1回

多摩川源流大学のすべて！

～小菅村で村人と若者が共に学び成長する軌跡～

今年度で5年目を迎えた源流大学。今後全国に源流大学を展開していくためにも、その手法や運営体制等について全4回の連載形式で皆さんにご紹介していきたいと思います。第1回目は、「源流大学の実習日記」として、1泊2日の実習の流れを体験記風にまとめあげました。

2010年活動報告

今年度の実習は、例年通りの源流基礎コース（1年目）及び源流応用コース（2・3年目）及び、特別講座として「チェーンソー講習会」を設置し、合計20回の実習を実施しました。また、東京農大エクステンションセンターの企画として、一般の方向けの4講座を開設し子どもも含め72名の方が参加しました。

特に今年の実習の特徴としては、源流研究所が長年にわたり築き上げてきた多摩川流域での市民団体との連携をいかした「流域課外活動」を設け、小菅村での実習に加え下流域での市民団体のイベントや多摩川関係の施設で実施している活動も実習と認定し、「源流から河口までを学びのフィールド」として、幅広い知識と体験ができるようにカリキュラムを編成しました。

有志学生で結成された「源流放課後の会」による田んぼの再生は、3年目を迎え病害虫に対する防除策の試行錯誤の成果と、全国では不作の要因になった猛暑が、小菅長作田んぼにはいい影響が出たようで、みごとな豊作となりました。この学生の作ったお米は、村内の学校給食にも提供され、大変喜ばれました。

村民講師とともに農業体験

オーライ！ニッポン大賞受賞

3月9日（水）東京代々木オリンピックセンターにて、都市と農山漁村の共生・対流推進会議主催、農林水産省共催の「第8回オーライ！ニッポン大賞」で多摩川源流大学がオーライ！ニッポン大賞を受賞いたしました。この大賞は、都市と農山村の交流に取り組む団体や個人に対して表彰されるものです。授賞式当日は、源流大学を代表して事務局の4名と学生が参加し、審査委員長の養老孟司氏から賞状とトロフィーを頂きました。

審査員の講評として「都市部の大学と山間部の自治体が連携し、都市農村交流を進めている好例で、学生のための授業ではあるが、地域住民を講師に招いたり、共に作業して新たな展開を作るなど、地域活性化にも貢献。今後の農山漁村の担い手の育成の場としても大いに期待できる点も評価された。」と言葉を頂きました。

オーライ！ニッポン大賞受賞
（代々木オリンピックセンター　3月9日）

この賞は、村民の皆様と共にこの5年間、源流大学を育て上げてきた成果であり、関係者各位の皆様の協力とご尽力がなければ受賞できなかったものです。これからもより一層充実した活動を展開していきたいと思っております。最後になりますが、これまで源流大学の活動に携わって頂いた村民の皆様全員に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

編集後記

現地事務局　石坂真悟の

農山村と田舎暮らしや過疎地域の活性化に興味があり、前職を辞めこの源流大学の現地事務局として、5年が過ぎた。最初の1・2年ほどは、源流大学という大きな組織の現地事務として、右も左も分らないまま住民の方の得意分野を聞きに回ったり、村の行事やイベントに駆け回った。今でも、多くの住民の方に支えられてこの源流大学が動いていることを感じずにはいられない。

こんなにも協力的な空気が醸成されているのも、長年小菅村が「上下流連携」というキーワードを掲げて村づくりを行っており、その中で多くの住民が関わり、交流に対する受入れの地盤が整っていたことが大きいと感じる。

小菅村の方々は、日常生活の農林業における手わざや知識、食生活に関して特に意識せず、当たり前と思っている事が多い。しかし、私のように移住してきた身からすると、それらの技や知識はまさに目からうろこが落ちるほど、面白く興味深いものばかりだった。この知恵こそまさに「生きる力」であり今の自分が持ちえない知恵なんだと感心させられる。この知恵に遭遇した瞬間、まさに私は身震いを感じる。「こんな興味深い、面白いこと、学生も体験しなきゃもったいない！ぜひ紹介したい！」と、それまで止まっていたプログラムづくりの思考回路が全開になり、湯水のごとくアイデアがあふれてくる。人それぞれ感じ方が違うと思うが、私が小菅村で感じたこの様な体験を、少しでも多くの方に体験して頂きながら、これからの大学生活や勉強に役に立てて欲しいと願っている。

源太の実習日記～ある実習の記録～

私しずくちゃん。
源太君の実習の
サポートをする
水の妖精です。
よろしくね☆

☆奥多摩駅到着☆

新宿から奥多摩へは休日なら
「JR中央線ホリデー快速奥多摩行き」に乗ろう！

源太くんあわてて武蔵五日市
行きの車両に乗っちゃった！
よく確認して！！

40分ほどバスに乗ると
いよいよ山梨県小菅村
に到着！

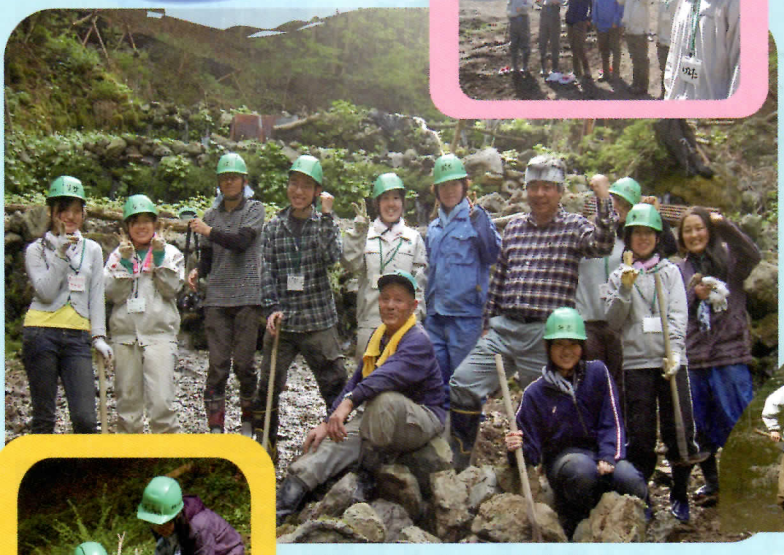
「ここが源流大学白沢校舎か～」
ここから源太君の実習が本当にスタートします。

☆白沢校舎到着☆

どきどき今日はどんな実習をやる
のかな？楽しみと不安の中地元の
住民講師の先生にご挨拶。
住民講師の先生は優しく色々教え
てくれそうで源太も一安心。

奥多摩駅には農大の事務員がいた。
源太も列に並んだ。

☆実習風景☆



実習には農大の先生も来ているので
この実習で仲良くなった他の学部の
先輩は道具について詳しく聞いてい
るぞ。源太もあの先輩のようになり
たいと憧れの眼差しで見つめるので
あった。

2日目も朝ご飯を食べたら実習！
住民講師に作業手順や道具の
使い方や村の歴史につい
ても教えてもらえた。

一生懸命がんばったので住民講師にも
ほめられ、女の子にモテモテの源太君。
「あしたもがんばるぞー」と目を輝かせた。

小菅の湯は美人の湯と言われ
アルカリ性のお湯が肌をすべすべに、
心も体もほぐしてくれる。
「今度は源子ちゃんも連れてこよう」
と源太は決意するのだった。

☆温泉入浴☆

「宿には歯ブラシもタオルもない！」
源太君忘れちゃったのね。。。しょうがない
今日は歯磨きしないで寝るしかないわ。

☆夕食☆

夕食はおいしい地元のお母さん料理が並ぶ。
源太は食べ過ぎて苦しいくらいだ。
季節や宿によって食べられるものも変わるそうなので
次回の実習も楽しみな源太であった。

☆帰路へ☆

作業も無事終了し、みんなで昼食を済ませ
たらいよいよこの実習も終わりだ。
一番簡単な地域振興それは物産館での
買い物。源太は昨日食べたこんにゃくを
母へのお土産にした。
「お母さんきっとよろこんでくれるな。」

源太君、みんな！
小菅村で待ってるよ～

楽しかった実習も奥多摩駅に着いたら終了。
実習でできた友達と電車に乗りながら思い出話に花が咲く。
「またあのおじいちゃん、おばあちゃんに会いにいくぞ！」と源太は電車に揺られながら思うのであった。

『植物と人々の博物館』案内

平成21年5月に「特別展　小菅村の暮らしを支えた養蚕展」を開催しました。調査のために小菅村内を訪ねて歩くと、養蚕の歴史は至るところに残っていました。旧家を訪ねると、2階へ上がるための手段は梯子のまま。2階は当時、養蚕を行ったままのぶち抜きの部屋になっており、当時の道具がそのまま残されていました。高齢化が進む小菅村。2階への上り下りが梯子であれば、お年寄りは利用する方法がありません。そのため、当時のままの姿が残っていたのです。元気でマメな家ほど、当時の民具は薪にしてしまったと聞きました。

昭和50年頃、小菅村教育委員会は村民に呼び掛け、民具を小菅村中央公民館に保存しました。人口の少ない小菅村には専門の職員がいる訳でもなく、民具はそのまま倉庫で30年間眠り続けていました。

「植物と人々の博物館」の様子

平成16年。東京都小金井市にある東京学芸大学。そこから発生したNPO法人自然文化誌研究会、雑穀を研究するミレット・コンプレックスの2団体が小菅村にきました。

小菅村で伝統的に栽培されている雑穀。アワ、キビ、アカモロコシ(タカキビ)、シコクビエなどを研究と共に村の財産として売り出していくことを進め、実際に、毎年5月に雑穀栽培講習会を開催し、村内・村外に広めていきました。現在、小菅の湯では雑穀ビールを販売し、その成果を上げています。

平成18年。東京学芸大学と小菅村は社会連携協定を調印しました。東京学芸大学は教育学部の教員養成大学であります。

東京学芸大学学生が小菅村で実習を行い、村の伝統的な智恵を学びます。その中で、小菅村中央公民館に眠る民具を整理していくことになりました。

作業着にマスクをして、30年間の埃を落とすところから実習は始まり、民具は掃除され、番号を振られ、表に出てきました。

ここからが実習の本番、小菅村文化財審議委員の皆さんを中心に、民具の聞き取り調査を始めました。村民の方々は昔を懐かしみ目を細めながらたくさんのお話をしてくださいました。

聞き取った成果はデータベース化して、小菅村中央公民館にて検索できるようになっています。

この作業を進めていく上で、小菅村の了解・協力を得て、小菅村中央公民館を「植物と人々の博物館」として整理していくことになりました。その博物館は、民具の展示のみならず、実際に小菅村で継承されている文化や技術、生き方そのものが博物館の内容である～小菅村全体が博物館であるという考え方に沿って進めています。「特別展　小菅村の暮らしを支えた養蚕展」においても、当時の民具を使いながらの糸取りを行いました。

村全体を博物館とし、その情報発信基地として「植物と人々の博物館」があります。

このような考え方を「エコミュージアム」と呼び、日本国内でも活発に活動している地域があります。情報発信基地は「コアミュージアム」であり、村内の至るところに「サテライト」があります。

平成21年9月「日本エコミュージアム研究会第15回全国大会」を小菅村で開催しました。全国からの参加者に小菅村の伝承を体験してもらいました。

そのように、「植物と人々の博物館」づくりが進められています。

この動きを支えているのが「ミューゼス研究会」という村民有志の団体です。村内各団体と連携していますので次回紹介したいと思います。

問い合わせ　植物と人々の博物館
TEL 0428(87)0165
(担当　黒澤)

広葉樹の苗木を育てる会が学習会

(1)苗木づくりプロジェクト始動

NPO法人多摩源流こすげは、3月23日、小菅村役場で「広葉樹・苗木プロジェクト説明会」(司会進行・望月事務局長)を開催した。当日は、午後から雪が降り続け、足下が大変悪い中、村民26名、スタッフ6名の合計32名が参加。大勢の参加者で村民の関心の高さを示す活気のある説明会になった。

(2)事業の趣旨と、実施体制について

続いて、源流研究所の中村所長が、事業の趣旨と、実施体制について説明。苗木づくりの方法に関して

1)種どりについて
□桜　・5月～6月に実施する。
□その他・9月～10月に実施する。

2)山どり苗木について
□5月～6月に幼樹採取を実施する。幼樹を採取した地点をデータ化し、母樹として位置づけ、安定的な山取り苗木の確保をめざす。
□昨年度実績で小菅村の広葉樹の森から活用された苗木は・ナラ、シオジ、カエデ、ウツギ、クマシデ、フサザクラなどである。

(3)カエデ類やハリギリ・トチがいい

東京農業大学の菅原准教授は、

●「どんな苗木がいいか。カエデ類が一番いいと思う。源流の森には、ハリギリ(センノキ)やトチの木もあり、これらもいいと思う。」

●「また、沢の崩れを防ぐフサザクラもある。沢に育ち、沢を保護してくれる。フサザクラの上部にシオジが育ち、その上部にモミジやハリギリがある。こうした植生もありだと思う。」

●「今、檜原のサントリーの森でいろいろ試験を行っている。そこは、皆伐地であるが、スギや広葉樹の針広混交林をつくっている。いずれにしろ、樹木の特性を生かした森づくりが大切である。」と分かりやすく解説され、参加者に大きな確信を与えた。

(4)全員発言の意見交換会

続いて、意見交換会に入り、参加者全員が自分の思いを述べながら自己紹介した。「苗木を育て小遣い稼ぎをやりたい」「ムラづくりとかかわりたい。」「高齢者と一緒にやりたい」「何度も説明会を」「苗木に興味がある」「夢に終わらせないようにしたい」など、多くの意見が出された。

望月徹男事務局長は、今後の活動のイメージとして、「一年かけて、みんなで苗木づくりのノウハウを学ぶ。そして、1)こんな事業をすることを口コミで広げよう。2)菅原先生を講師に勉強会を重ねる。3)ノウハウを学んで、数年後から各個人の畑で苗を育て、苗を出荷する」ようにしたいと発言した。

緑のボランティア募集！

●民有林（スギ・ヒノキ）の荒廃にストップをかけよう●

多摩川源流に広がる民有林の多くは、戦後の拡大造林政策でスギやヒノキが植林されましたが、木材の大量輸入による木材価格の低迷により、間伐などの手入れが行き届かず、森林の荒廃が進んでいます。私たちは、これにストップをかけようと「森林再生プロジェクト」を始めました。流域の市民のみなさん、源流大学の若者と一緒に緑のボランティアに参加しませんか。

■主　　催　NPO法人多摩源流こすげ・小菅村役場・多摩川源流研究所
■協　　力　北都留森林組合小菅支部・多摩川源流大学
■場　　所　小菅村内の民有林他
■年間活動日　（定員はいずれも25名・募集対象は16歳以上の健康な方）
第１回　9月17日（土）　18日（日）
第２回　10月 8日（土）　9日（日）
第３回　11月19日（土）　20日（日）
■日　　程　（1日目の昼食・飲み物及び着替え、タオル・雨具は準備してください）
1日目　10時　JR奥多摩駅集合（送迎バス有）　13時～16時　除伐・間伐作業
2日目　9時～14時　除伐・間伐作業　お箸づくり
14時半～ 小菅の湯で入浴
16時半　JR奥多摩駅解散
■参 加 費　7,000円　（保険加入・宿泊・食事その他含む）
■参加申込先　NPO法人多摩源流こすげ　☎0428−87−7055

この事業は国土緑化推進機構の助成を受けて実施しています。

第3回 全国森林作業道研究会の実施要項（案）

平成23年3月20日
全国源流の郷協議会
会長　降矢　英昭

全国森林作業道研究会の実施要項

■日　　時　9月12日（月）～13日（火）
■場　　所　長野県根羽村役場（開会　12日　午後1時）
（宿泊代　12,000円　1泊4食込み）
■事業内容：「根羽村の森作りに学び、流域連携による森林資源の活用」
～「森林保全型路網（仮称）の開設・普及にむけて」～
講　演　「森林・林業を巡る現状と課題」
「根羽村の森づくりと森林資源の利用」
「森林保全型路網の開設・普及に向けて」
先進事例の紹介　根羽村森林組合・愛知県・山梨県　他
■参加予定者講師
長野県根羽村長　長野県根羽村
酒井秀夫教授　東京大学大学院農学生命科学研究科森林利用学研究室
竹内典也先生　京都大学名誉教授
宮林茂幸教授　東京農業大学森林政策学研究室
岡橋清元会長　奈良県吉野郡川上村　清光林業
竹内清晴先生　明治用水土地改良区
榎本真一先生　壊れない道づくり研究会幹事
■連 絡 先　長野県根羽村振興課　☎0265−49−2111

第2回全国森林作業道研究会

この事業は国土緑化推進機構の助成を受けて実施しています。

第3回 多摩川源流トレイルラン大会

多摩川源流に位置する小菅村は、人口800名の小さな村です。私達トライアスロンクラブは、2年前から小菅村の村興しイベントとして、多摩川源流トレイルランを始めました。取り組んでみて驚いたことは、豊かな森と清らかな水に溢れた小菅村の原風景の素晴らしさでした。トレイルランコースとしては、最高のロケーションでした。初回の参加者は80名でしたが、昨年は300名を超えました。今回は、600名の参加を予定しています。是非、多くの皆さんの参加をお待ちしています。

第2回源流トレイルラン大会

第3回多摩川源流トレイルラン実施要項（案）

〔1〕開催日時　2011年9月18日（日）　受付8時　スタート10時

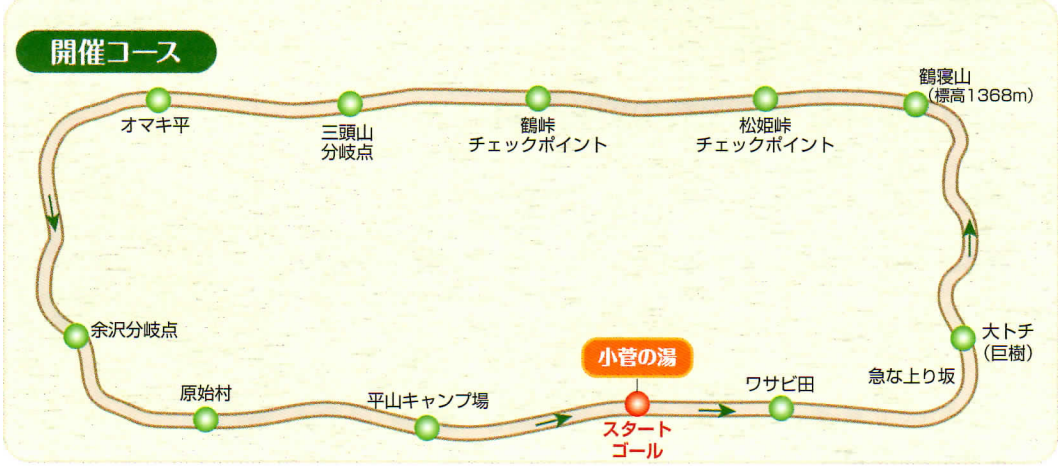
〔2〕開催場所　山梨県小菅村　スタート＆ゴール　小菅の湯

〔3〕参加費　6,000円（参加賞　超軽量トレラン用Tシャツ予定）

〔4〕参加資格　・男女16歳以上　・山で挨拶が出来る人
・過去に計測チップの未返却のない人

〔5〕携帯品（義務）　・水1リットル以上・トレラン用シューズ・手袋・健康保険証
・携帯電話（推奨）

〔6〕開催コース（距離 30km　高低差 約650m　制限時間 4時間半）



〔7〕主　催　多摩川源流トレイルラン大会実行委員会
（実行委員長　広瀬和章小菅村観光協会長）

〔8〕後　援　小菅村、西東京市役所トレランクラブ

〔9〕申込・問合せ先　KFC　トライアスロンクラブ　http://www.kfctriathlon.jp/

〔10〕事務局　小菅村観光協会（☎0428-87-0741）